

子どもの生きがい



松隈玲子

「子どもの生きがいってどんなことかしら」と何人かの
人にそう問いかけてみました。

ある人は「そうねえ、一口にいうと、子どもが成長する
こと、大きくなること、もう少しくわしくいうと、大きく
なるんだと期待する気持ち、大きくなったなと気付く気持
ちの両方だと思う」と大変明快に答えてくれました。また
ある人は、「子どもの生きがい？ そんなものあるものか、
小さい時から、生きる意味だの、生きがいだの、そんなこ
とを考えて生きなければならなかったら残酷だよ」と面倒
くさそうにいました。

子どもの生きがいをどう解釈するか、それは大変むずか
しいことであるかもしれません。けれども、子どもにだっ

て、与えられたいのちを、生き生きと躍動させるゝとき”
をその育ちゆく過程に、しばしば体験することがあるよう
に思います。

日々の子どもの生活の中で、子どもの心が生き生きとは
ずむその時を、感じとめ、うけとめることから、生きがい
をさぐりあててみたいと思います。

ぼくの生きがい

「ねえ、潤ちゃん、生きがいって何だと思う？」小学校
三年生の息子にいました。

「生きがい？ 『ああ、生きていてよかったと思うこと』
だよ。ママ、知らなかったの？」

「さあ、わからない」という答えを予想していた私は、幼い幼いと思っていた息子からの意外な返答に驚いてしまいました。

「ああ、生きていてよかったなんてよくそんなことばを知っていたわね。じゃあ、その生きていてよかったというのはどんな時だと思う？」

「ママ、この前テレビであったじゃない、老人の生きがい、生きていてよかったっていうのがね。おじいさんになるまで生きていたから、孫が買ってくれたテレビも見られるし、食べたいなあと思っていた、アイスクャンデーを毎日でも食べられるし、ぼくは、生きがいてのは、その人のしたいことができたり、ほしいものがもらえることだと思うから、ママみたいに、そんなきき方しても答えられないな。だって、生きがいてのは一人一人みんなちがうと思うし、それにおんなじ人だっていつも同じ生きがいなんかもっていないと思うから」

「わかりました。じゃ潤ちゃんの生きがいていうのを聞かせてよ」

「ぼくの生きがい、そうだなあ。給食に時々だけドミツママができることと、毎日十円のおこづかいを、ずっとため

て、あと十六ねたら、変身サイボーグの部品が買えること、ぼくの大好きなおもちとソーセージとおすが一ぺんに夕ごはんに出ること、ええっとそれから、一ぺんには思いつかないや」

「生きがいて思いつくことなの？」

「まあ、いいじゃない、ママ。かたいこというなよ」

親がどきまぎさせられるような、理屈っぽいことをいうかと思うと、自分自身の具体的な問題にかえてくると、とたんに、人生とは食べることばかりが目的みたいな、なんとも幼いことばになってしまふ息子を見てみると、現代っ子の特徴がよくあらわれているような気がしますが、子どもの生きがいは欲求の場の中に芽生えたプラスの誘意性にむかって突進すること、そのものを獲得するためには、全精力を惜しみなく費やすことのできる状態といってもよいように思います。

ですから、大人の生きがいのように遠いかなたの希望に向かって精進したり、わが子の成長の過程をみるように徐徐にもたらされる喜びをたのしむというのは違って、直観的で、しかも、目的に向かってまっしぐらにつきすすむ時には、他の事象は一切意識の中になくなるという特性を

備えているのではないかと思えます。

そしてそれは、年齢の低いほど、一つのものに対する持続時間は短く、しかもしばしば反復される特徴をもっているようです。

積木のおぼっし

次男の協が二歳のころでした。積木を五つほどつまあげ、一番上に、プラスチックのお皿をかぶせると重心がかたむいて、積木はバラバラにこわれてしまいます。何度も何度もくり返して、やっとうまくのったのを見て、「うまいうまい」と自分で手をたたいていると、「おうちが帽子をかぶったね。うまいうまい。おうちがカッコイイってよろこんでるよ」とパパにほめられました。

その時から、毎日毎日、あくことなく、五つの同じ積木と、赤いプラスチックのお皿のおうちづくりがはじまりました。

朝、目がさめると「ママ、おうちおぼっししてあげるね」がはじまり、夜、おやすみなさいの時間を告げられると、「おうちおぼっし一ぺんしてからね」まで、多いときは一日三十六回もの記録をつくりました。そのうちに「おちやわ

んおぼっし」「おくつおぼっし」「クレヨンおぼっし」と何にでもお皿をあぶせることに発展し、食器棚あらしに手をやいて「かわいいクレヨンの帽子をつくってあげましょう」と折紙で三角帽子をつくってやると「かわいいお帽子できたねえ」と大喜びで、一日中クレヨンの箱を出してきて、帽子をかぶせたりぬがせたりして遊びました。

ところが、次の日から、「ママ、おくつお帽子ピタリしてね」「ゴジラお帽子にやう（にあう）してね」と、そのものに丁度あう帽子をつくれとせがみはじめ、つい、炊事で手が離せない時「どんなのがにあうか協ちゃん考えてあげて」というと、「うん、ゴジラどんなお帽子にやうかねえ、ゴジラに聞いてくるからね。すぐ帰ってくるからね。ママ、ちょっとまってね」とおもちゃ箱のゴジラめがけてすっとなでいきました。

「ママ、ゴジラがね、やっぱし（やはり）あおいあおいのがいいって」目をきらきらさせて告げにきていた姿を思い出すと、そのころの、帽子にあげ帽子にくれた協の一日は、父親にほめられた喜びの再現をもとめてあくことなくり返され、一つの流れをもとにして、次々にきっかけをつかまえては変化し、発展していくことであったように

思います。朝めがさめて「今日も帽子で遊ぼう」と思うその時から、「あしたは、もっとステキな帽子をママに作ってもらおう」と思って眠るまで、幼いながら、その生活のすゝめの活動の源となった「ぼうし」は、協の生きがいであったといえましょう。このことを通して、子どもの生きがいも、より高いものに発展させていくためには、親と子のかかわりあいを大切に考えなければならぬということをお伝えされたような気がします。

お誕生 おめでとつ

協の四歳の誕生日も間近なとき、六年生の姉がいました。

「ママ、協ちゃんのお誕生日、お友だちよぶの?」

「協ちゃんはまだ幼稚園にはいったばかりだし、お友だちも、一人ではお客さまにこれないでしょう? お母さんたちが、連れてきたり、お迎えにきたり大変だから、今年はおうちの人のだけにしましょうね」

「ふうん、仕方ないね、和くんたちも来年になったらお客さまにこれると思うよ」

すると、この話をききつけた三年生の潤がとんできまし

た。

「可哀そうな協、まあいいよな。陽子姉ちゃんとぼくが盛大なパーティをしてやるからたのしみにしている」

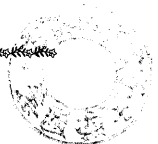
それから毎日毎日、学校から帰ると遊びにもいかないで、二人でプレゼントをつくり、誕生会の計画をしました。

「ママ、姉ちゃんと兄ちゃんが、お部屋にはいつちゃ駄目って、ぼくのプレゼントつくってるのだから」

「お誕生日、まだ? いつくるの? いくつねたらくるの? ぼくたのしみだな」

入園以来、幼稚園で何回もお友だちの誕生会を経験し、誕生日の子どもには、先生が縫ってくださった、ワッペンを肩にとめてもらえて、みんながお祝のうたをうたってくれて、その日だけは三年保育の組も、幼稚園で、お母さんたちのつくった、おいしいケーキやごはんを食べられるので、何となく自分の番が待遠しいような気持ちの素地ができていたのでしょうか。二歳の時とはちがい、「ぼくの誕生日」をたのしんでたのしんで待ちました。

やがて当日、「協ちゃんの誕生会ご案内」のポスターが、父と母とおばあちゃんの部屋それぞれにはられました。兄姉が一週間がかりで計画し、練習したプログラムが食堂に



さげられて、誕生会がはじまりました。

- 一、司会 潤・会場係 陽子
 - 二、ハッピーバースデーのうた みんな
 - 三、ケーキのローソクに灯をつける パパ
 - 四、ローソクを消す 協
 - 五、ケーキを切る ママ
 - 六、ケーキを食べる みんな
 - 七、お皿を片づける 陽子
 - 八、落語 潤
 - 九、ピアノ 陽子
 - 十、プレゼント みんな
 - 十一、お礼のことは 協
 - 十二、協ちゃんのうた みんな
 - 十三、協ちゃんのプレゼントを片づける おばあちゃん
- 家族全員に役割がわりあててあって、苦笑させられますが、それでも、この日のためにきょうだいげんかも一時休戦とばかり、朝の登校時から、夜、床を並べてねむる時まで、一つの目標をめざして考え、活動した一週間、毎日がさぞはりあいのある日々であったらうと思います。
- 一つ一つ包装紙でつつみ、リボンをかけたプレゼントが

陽子から十個、潤から六個、パパとおばあちゃんとお金を出しあって買った輪なげ、ママが苦心してつくったうさぎの枕と、かかえきれないほどのプレゼントをもらって協は「すごいねえ」「すごいねえ」の連発でした。

学校の家庭科でミシンや刺しゅうを習いはじめたばかりの姉が、長い時間をかけてつくった、通園手さげ、ブックカバー、筆入れ、クレパス袋、ナプキン、上ぐつ袋など……、工作のすきな兄が工夫した手紙入れ、ネンドの怪じゅう、紙ひこうき、風車、それに、昨年まで宝物にしていた怪じゅう的あてゲームなどをみていると、あれもこれもとお友だちをよべない弟に同情してつくった兄と姉のあたたかい思いやりが感じられて、「こんなにたくさんつくるひまがあったら、勉強すればよかったのに、宿題もそこそこに、こんなことばかりしていたのね」といいたい気持ちも引っこんでしまいました。

子どもの生きがいは、年がすすむに従って、自分自身のためをめぐらしてというだけでなく、他のもののためにも、それを求めることができるような気がします。そして、このことは、人間としての生き方にふかいかかわりあいをもつといえるのではないかと思います。

その日から、協の「プレゼントにいのちをかけて」といいたいような日々がはじまりました。家族全員の誕生日をたしかめ、父親の誕生日が一番間近だということを知ると、「パパの誕生日のプレゼントつくるからあき箱ちようだい」と毎日毎日、あき箱を重ねてセロテープではった戦車や、新聞紙にマジックで何ともわけのわからない絵をかいた壁かざりつくり「パパよろこぶよ、『すごいね、すごいね』ってとびあがるかもよ」と熱中しています。

「早く誕生日がこないと、ぼくの部屋は、ゴミ捨て場みたいになるぞ」とパパを冷や冷やさせていることにはおおかまいなく、朝目がさめると「今日は何日？ パパの誕生日まだ？」と聞き、「まだよ」というと安心してまた一ねむりする協をみていると、きつと誕生日の当日は、午前五時か六時の早朝の誕生会になることでしょう。

こう考えると、子どもの生きがいは、自分がかつて、全身で受けとめた喜びの体験の再現をねがう心のあらわれでもあるように思えます。このことから、子どもの生きがいは、突然、単独に生じるのではなく、人と人の、あるいは人と物とのかわりあいの中で芽生え、育っていくものであるということができません。

生きていくたのしみを求めて

夏休になったばかりのある日、「ママ、冬休みはいつからかねえ」という息子にあきれていいました。

「まだ夏休になったばかりじゃない」

「だってさ、学校がはじまると、毎日きまったお勉強があつて、同じ時間ごろ帰ってきておやつ食べて宿題して、ごはんたべて、テレビ見て、九時になったら、ママが明日おきられないからねさいって言って、それでおしまいでしょう。変身サイボーグセブンなんて、ぼくが考えたマンガかくひまなんかないんだもん。でもおやすみが長くあるとね、三日分ぐらい、夏休帳まとめてやるでしょう、そしてたらあとは、ぼくがきめた時間割で、一日中だってマンガもかけるし、理科の自由研究もできるし、夜ねる時だつて、すごく明日になるのがたのしみなんだから」

調子のいいことばかりいってと笑ってすごすわけにはいかなない心のさげびを、とめどなくつづく夏休みへの期待のことばの中から、感じさせられます。知らず知らずのうちに、あるいは全く善意のつもりで、私たち周囲のおとなは、

子どもの生きがいの芽に気付かなかつたり、あるいはつみとってしまったりしているのではないでしょうか。

「ママ、宿題勉強じゃなくて、自由勉強していくとね、先生がシールをくれるんだよ。三十枚たまるとね、怪じゅうシールをくれるんだ。忘れものするとね、一枚とられるかもしれないって」

重大ニュースだといわんばかりに報告する息子に大して感動もせず、それどころか、教育者らしさというわるいくせが頭をもたげて、心の中では「シールのための勉強なんてなさけない子」と思っていた私でした。

ところが、その日から、「ママ、ぼくね、自由勉強、カメの生活にしたよ。毎日カメについて調べるんだ。そして先生がね、カメの先祖についても調べてみなさいって、もし、時間があったらね。ぼくの苦手な書取を五つずつ書いてみたら、きっと覚えられるって。明日の時間割大丈夫かな。シールとられちゃ大変大変」と見がえるように意欲的になった潤をみて、つくづく反省させられたことでした。

これまで、何度いいきかせても、いつの間にか、土曜日には一週間分全部の本がランドセルにはいって、おまけに給食袋まで平気でぶらさげていくわが子に、これも性

格かとあきらめかけていた時であっただけに、シールによる動機づけの効果は目をみはるものがありました。

子どもの生きがいは時としては、適切な動機づけによっても生まれるものであることを知りました。

「陽子ちゃんは、生きていてよかったと思うのはどんな時？」

六年生の娘はしばらく考えていいました。

「あのね、今日もたのしかったなあ、明日もたのしいことがありそうだと、夜ねる前に神さまにお祈りする時に思える日。わたしね、夜、ねる時が大好き。だって明日にながっている今日でしょう。それに、ママや潤ちゃんやみんなと、大きくなったらなんて床の中でよくお話するでしょう。そして目をつぶると、いろいろなことを考えるの、人間に生まれてよかったなって思うこともあるのよ」

他のものと差別するという意味ではなく、心から人間に生まれてよかったと思える心、これも生きがいのもち方として最も大切なことであるように思います。

(西南女学院短大)